sonorium（ソノリウム）で演奏する 海老彰子（ピアノ）

白い空間に広がる音の色彩

「ホールが演奏家の演奏とともに育っていけるのが理想ですね。ホールというのは演奏家によって栄養と生命を与えられて、そして育っていくものですから。子供を育てるように、丁寧に、じっくりと成長させていきたいんです」と、今年4月にオープンした音楽ホール「sonorium」代表の楠しずよさん。閑静な住宅街にあれっ？と思わせるような白亜の建物は、中に足を踏み入れた途端に日常ではない異空間の感覚をもたらす。100席のホールそのものは決して大きなスペースではないのだが、天井の高さや壁面の工夫などが、どちらかといえば密閉的な音楽ホールのイメージとはまったく異なる広がりを感じさせる。音楽ホールの設計において経験豊かな建築家青木淳氏との共同作業のなかで、建築的造形がそのまま音響的効果を持つよう、まず最大限に音響にこだわり、建築資材、色彩、設備と、あらゆる細部にまで徹底的にこだわった。サウンドデザインは永田音響設計が担った。

主催公演のほか、貸ホールとしても運営され、2008年からはCD製作も開始する予定。広告や雑誌でファッションやスキンケアのクリエイティブ・ディレクターやコピーライターをしてきた楠さんは、傍らピアノの勉強も続けてきたが、「日本はこの30年ほどのなかで、まず衣の発展、次に食のブームがありました。それぞれ、世界に注目されるほどに成長したといえます。成熟の順番として衣食の後に来るのが住。音楽や美術などといったアートは空間を強く求める点では住のジャンルと思います。いまその時代が来ているように感じます。こうした文化の成熟の順番を経たなかで、イマジネーションを豊かにする空間でクラシック音楽を楽しみたいという方も増えてきているのでは……。演奏家、リスナーの両方が満たされる空間にしたいですね。メディア関係のスタッフも多くいますので、今後sonoriumなどでは情報発信や演奏家の方々へのサービスも充実させていきます」。

天井高5.9メートルの空間、ホール内のどの場所でも音の響きがほぼ同じになるという密閉型音響設計が施されている。地下に頂だけのためのスペースが設けられたのは音響のため。

客席用の椅子は座面に背もたれ、アームなどのすべてにおいて必要な地よさが計算された「こだわりの特注品」。

ワインセラーを完備したホール・ホワイエにあるバーコーナー。

ホールには、演奏の合間にワインを提供できる本格的な設備があるほか、演奏会後はパーティースペースとしても使える。すでにこれまでに開催されたコンサートでは、訪れた人が、素晴らしい音楽も含め、丁寧な“おもてなし”を受けた気分になったという。

「うちのような小さなホールは個性を出さないと存続できません、きっと…。ですから、ここで演奏を聴く前と後で、ほんの少し人生が変わったな、というふうに感じていただけるよう努力します」

この12月16日には、スタインウェイ・フルコンサート・グランドピアノ選定記念として海老彰子のリサイタルが開催される。選定の際にも協力した海老彰子さんからは、リサイタルとsonoriumについて、美しいコメントが寄せられている。

「閑静な住宅街に人知れず佇む、とびきり上等でモダンな音楽空間。一見質素、しかし一番贅沢な環境で、音楽本来の楽しみを味わえる文字通り音楽の泉、sonorium。

作曲家が自分の曲を、友人達に聴かせたであろう、遥か昔の音楽環境に似ているsonoriumなので、ショパンの曲から数曲、そしてショパンと友人だったリストから＜孤独の中の神の祝福＞、そしてリストの先生にあたるベートーヴェン最後のピアノソナタ作品111を選びました。そう言えば12月16日はベートーヴェンの誕生日かもしれません」　文：吉羽尋子

© Linh GOICHOT

海老彰子

★海老彰子 in sonorium 12月16日(日) 14:30開演　パーティは17:30開始
●発売中
問：東京杉並／室内楽演奏ホール sonorium
03-6768-3000 www.sonorium.jp